大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

源氏物語における「動詞連用形+名詞」の語形：和歌の造語法からみて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神谷, かをる メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005068

源氏物語における「動詞連用形＋名詞」の語形

——和歌の造語法からみて——

神谷　かをる

一

源氏物語の冒頭を少し引用してみよう。

いづれの御時にか、……（中略）。はじめより「我は」と思ひ上がりたまへる御かたがた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（中略）「唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、あしかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

（新潮の日本古典集成本による。私に漢字に改め傍線を施したところがある。以下同）

傍線部のように、源氏物語には他の品詞から転成した（さらに複合させたものも含む）名詞が多いのである。この例では「もてなやみぐさ・起こり・頼み」が転成名詞であるが、その中で、「もてなやみぐさ」という語形について考察をしてみたい。すでに、「起こり・頼み」などの「動詞連用形の名詞形」については述べたことがある。[1] また、「もてなやみぐさ」（持て悩む＋種）式の「動詞連用形＋名詞」についても述べたことがある。[2] この後者について、少し追加して考察してみたい。

本来、よく用いるある種の人・物・場所などの名前や、地名などにおいては、長い文節による表現よりは、短い一語で表すほうが便利であろう。「狩る人」では、一時的な「狩る」かもしれないが、「狩り人」になると、専門的か否かは別にしてもその人のあり方を意味しやすく、その人の特性を一語で示しやすいであろう。事実、「動詞連用形＋名詞」という形態には、かかる

ものが多い。

ある種の人　狩り人・好き人

物の名　狩り衣

場所の名　入り江

地名・歌枕　堀り江

そして、かかる語の構成法は、上代からすでに存在して、和歌にも用いられている。

万葉集で、「――所・――人・――妻（または夫）」という形態で挙げると、つぎのような語が見出せる。（傍線部が「動詞連用形＋名詞」の形）。

所――いでまし所・うたまひ所・宮所

人――老い人・から人・うぢ人・旅人・つき人・なには人・ぬす人・ほかひ人・みかり人・みちゆき人・宮人・やそうぢ人・をちかた人・よき人・もろ人

妻・夫――こもりづま　いはひづま・おもひづま・ことよせづま・片恋づま・

ただし、音仮名で記載されて、読みが明確になるのは少ない。「カタラヒグサ可多良比具佐 4000・ワスレガヒ和須礼我比 3629・コモリヅマ己母利豆麻 4148」など。

二

そもそも名詞は、仮名の文学作品（源氏物語の頃まで。参考として万葉集も加える）で見てみると、使用頻度は次のようになっている。『古典対照語彙表』の統計表%を引用する。

異なり語数

万葉集 59.7〉古今集 55.1〉後撰集 53.2

土佐日記 55.1〉伊勢物語 54.6〉枕草子 53.5〉蜻蛉日記 47.1〉

竹取物語 44.3〉源氏物語 42.5（紫式部日記 50.7）

延べ語数

万葉集 53.0＝古今集 53.1〉後撰集 50.9

土佐日記 49.8〉伊勢物語 49.3〉竹取物語 45.0〉枕草子 44.2〉

源氏物語 41.6〉蜻蛉日記 40.7　（紫式部日記 52.5）

すなわち、異なり語数では、和歌では万葉集・古今集・後撰集というように、時代が下がるにつれやや減少している。延べ語数でも、万葉集と古今集はほぼ同じだが、後撰集でやや減っている。そして日記・物語類（紫式部日記を除く）でみると、土佐日記・伊勢物語では多く、蜻蛉日記や源氏物語で減っているのである。大雑把にいうと、日記や物語類でも、時代とともにやや減っているのである。さらに、和歌での使用が日記物語

類よりも概して多いということも言えよう。延べでいうとどの作品よりも歌集に多い。（紫式部日記は、この傾向とやや異なるが、それは日誌に近い面が包含されているなど、別の視点がはいるからであろう。別に考えたい）。

ところが、今問題にしている「動詞連用形＋名詞」という形態は、時代とともに、やや増しているように思う。ただ、ここで、調査するにあたって、平安時代の語彙について、語源的なものが関係するために、その語構成は認定が困難なものが珍しくはなく、「動詞連用形＋名詞」といっても、単純には抜き出しにくい。例えば「かりぎぬ・かりごろも」という語について、語源的には「狩る」ときの「衣」であろうが、平安時代の各作品の頃にその意識がどれほどあったか察しにくい。「狩り」で既に一語として完成していたなら、名詞「狩り」に名詞「衣」が接続したものと解せるからである。だから、以下に引き出したのは、厳密ではなく、一つの参考でしかないが、それでも、傾向は察せられそうだから、書き出してみる。ただし、名詞といっても、動詞から作られたもの「動詞連用形＋動詞からの転成名詞」は省いてある（含めたのは「渡し守・忘れ形見」――「守り・形見」をすでに名詞に成りきった語とみなした）。まず、和歌からみていく。

古今集

ありか（有り処）・ありかず（有り数）・いりえ（入り江）・うきくさ（浮草）・うきね（浮き寝）・うつりが（移り香）・おきどころ（置き所）・おもひね（思ひ寝）・かくれが（隠れ処）・かくれぬ（隠れ沼）・かやりび（蚊遣火）・かよひぢ（通ひ路）・かりぎぬ（狩衣）・くちき（朽木）・くもりび（曇り日）・しほやきごろも（塩焼き衣）・すきもの（好き者）・そなれまつ（磯馴れ松）・たむけやま（手向け山）・つかねを（束ね緒）・つりぶね（釣り船）・ぬれぎぬ（濡れ衣）・ひとわすれくさ（人忘れ草）・ほりえ（堀江）・むねはしりび（胸走り火）・うもれぎ（埋もれ木）・やまわけごろも（山分け衣）・わかれぢ（別れ路）・わすれかたみ（忘れ形見）・わすれぐさ（忘れ草）・わたしもり（渡し守）・わたりがは（渡り河）・をばすてやま（姥捨て山）・行き交ひ路（三語以上の合成は傍線）

後撰集

明け方・芦刈り小舟・木綿付け鳥・釣り舟・在りか・漁り火・入り江・入り日・浮き草・浮き橋・恨み所・植ゑ木・置き所なし・追ひ風・思ひ川・掛かり所・隠れ沼・懸け橋・笠取り山・か（予）ね言・蚊遣り火・狩り衣・

狩り人・朽ち木・恋ひ路・棄て衣・棲み家・染め川・焚き木・たそがれ時・（立ち野）・戯れ島・絶え間・散り方・釣り舟・慣らし顔・濡れ衣・堀江・もみぢ葉・焼け原・遣り水・別れ路・忘れ形見・忘れ草・侘び人

拾遺集

芦分け小舟・在りか・怒り猪・漁り火・偽り人・浮き木・浮き草・浮き島・浮きなは・浮き舟・うぢ川・うち垂れ髪・埋もれ木・置き所・置き餌・落ち髪・落ち朽ち葉・隠れ笠・隠れ沼・隠れ蓑・懸け籠・片割れ月・鶴のかひこ（卵）・蚊遣り火・通ひ路・朽ち葉・恋忘れ貝・菰刈り舟・しぐれ心地・茂みさ枝・しだり尾・（末摘む花）・染め川・（激つ瀬）・立ちど（立所）・絶え間・つなぎ犬・すみか（棲家）・釣り縄・解き洗ひ衣・流れ木・投げ木・並み倉・濁り水・濡れ衣・寝くたれ髪・ねりそ（練麻）・法の浮き木・走り井・人待ち顔・（伏し目・伏し原）・伏せ屋・堀江・松の浮き根・道行き人・結び松・藻刈り舟・もみぢ葉・焼け原・行き方・別れ路・忘れ貝・忘れ草・渡し守・侘び人

後拾遺集

在りか・漁り火・入り江・入り方・浮き草・浮きぬなは・浮き根・打ち解け様・埋み火・移り香・埋もれ木・〈落ち葉〉・生ひ先・隠れ沼・返り言・着慣らし衣・事有り顔・恋路・恋忘れ貝・忍び音・住みか・絶え間・薫き物・〈畳う紙〉・立ちど（処）・〈戯れ言〉・〈散り果て方〉・〈仕へ人〉・継ぎ橋・造り江（地名）・脱ぎきぬ（衣）・〈縫ひ物〉・ねぎこと（祈言）・ねや（寝屋）・練りそ（麻）・走り井・はふりこ（祝子）・〈火焼き屋〉・堀江・〈申し文〉・捲り手・負け方・増す鏡・待ち時・〈舞ひ人〉・〈まもりめ（守り女）〉・〈みつぎもの（調ぎ物）〉・〈みどころ（見所）〉・みなれざほ（水馴れ棹）・もみぢ葉・〈詠み人〉・別れ路・忘れ草・忘れ水・渡り河・姨捨山・をみごろも（小忌衣）　（　）は詞書の語）

竹取物語

有り様・仰せごと・織り物・返りごと・食ひ物・好き事・造り花・のけざま・侘び歌

土佐日記

売り人（諺）・おぎのり業・押し鮎・追ひ風（歌のみ2例）・返り事・上り路・忘れ貝（歌2）・忘れ草（歌2）・ゑひごと（酔言）（歌での用例は太字。以下同じ）

伊勢物語

厭き方・逢ひごと・有様・あり所・漁り火・落ち穂・飾り粽・返り事・通ひ路・狩りころも・狩り衣・かれ飯・籠もり江・ささげ物・しわざ・好き事・好き者・住み所・摺り狩り衣・染め川・たはれ島・使ひざね・造り枝・つごもりがた・釣り舟・問ひ言・貫きす（簀）・濡れ衣・のろひ言・引敷き物・振り分け髪・まさり顔・よみはて方・忘れ草・渡し守

落窪物語

茜染め草・上がり窪・遊びかたき・在りか・有り顔なり・有り様・出し車・打ち杭・埋み火・恨み言・老い心地・置き火・贈り物・落ち窪・驚き馬・仰せごと・御座し所・思ひ顔なり・下り所・織り物・懸かり葉・懸け橋・かしづき物・かづけ物・返りごと・朽ち葉・暮れ方・恋ひ路・（知らず顔なり）・知り顔なり・痴れ人・痴れ者・好き者・染め草・たきもの（薫物）・使ひ人・作り様・縫ひ指し物・縫ひ物・塗り篦・はかりごと・ひがみ痴れ人・まつりごと・舞ひ人・乱り心地・向かひ腹・焼い米・焼き石・造り戸・許し色・よけぢ（避け路）・笑われ草・ゐ丈・ゐ所

蜻蛉日記

赤朽ち葉・尼まさり顔・有様・漁り火・浮き葉・置き所・送り火・送り文・落としだね・仰せごと・織物・おれもの（愚者）・かいくり（掻栗）・書き手・書き日記・隠れ沼・懸け橋・賭け物・返り事・通ひ路・通ひ所・かりぎぬ（狩衣）・朽ち葉・朽ち目・曇り夜・暮れ方・恋ひ路・死に人・忍び言・好き者・すみか（住処）・住み所・絶え間・薫き物・畳う紙・たちど（立所）・立て文・たはぶれ言・釣り殿・釣り舟・ともし火・ねや（寝屋）・乗り物・賭り弓・走り井・引き局・まさり顔・まつり事・舞ひ人・乱り顔・乱れ糸・乱り風・召人・許され顔・夜さり方・（行く先・行く末・行く〜）

紫式部日記

有様・戴き餅・入れ帷子・浮き草・浮き紋・歌よみざま・打ち物・埋もれ木・置き口・贈り物・及び顔・織物・お迎へ湯・掻い練り・書きざま・懸け籠・朽木がき？さがりば下端・枝垂り柳・（知らず顔）・好き者・摺り目・摺り裳・そけもの退者？反りざま・薫き物・薫き物合せ・立ち顔・尋ね所・立て蔀・立て文・たはぶれ言・時に合ひ顔・縫ひざま・縫ひ目・縫ひ物・負けわざ・舞ひ人・

舞ひ姫・見所・迎へ湯・遣り戸・遣り水・湯巻き姿・(読まぬ顔)・(渡殿)・(酔ひ泣き)・をぎ人?納め殿・(折歌)

枕草子

遊びわざ・天降り人・綾織物・抗がひ事・有様・有り所・い出しうちぎ・祈り物・戒め者・入り日・浮き草・浮き島・浮き葉・浮き橋・浮き紋・牛飼ひ童・打ち解け言・打ち目・推し虱り事・生ひ先・仰せ言・梳り櫛・昔思い出顔・思ひ顔・思ひ隈・思い出所・思ひ人・織物・かき板・隠れ所・隠れ蓑・懸け金・懸け盤・掛け竹・飾り太刀・予ね言・返り事・髪上げ姿・狩り衣・刈る萱・枯れ野・消え方・聞き耳・黄朽ち葉・括り物・朽木形・朽ち葉・朽ち目・食ひ物・削り氷・試み事・しめし野・知らせ顔・知り顔・痴れ者・しわざ・透き影・住みか・摺り衣・添へ言・背きざま・染め殿・反り橋・絶え間・薫き物・巧み鳥?畳う紙・立て文・たはぶれ言・たはれ島・手向け山・憑き人・作り事・作り人・作り仏・作り絵・包み文・包み物・閉ぢ目・訪ひ人・とりこ養子・取り所・泣き顔・慰め所・名取り川・縫ひ殿・縫ひ物・縫ひ目・塗り籠・塗り骨・濡れ足・濡れ衣・寝起き顔・寝くたれ髪・寝所・眠り声・寝耳・練り色・のけ頸?・走り火・走り井・広ごりざま・ふりはた(振幡)・堀江・申し文・舞ひ人・舞姫・見所・見物・宮仕へ人・埋もれ木(物語の名)・求め子(舞の名)・物覚え声・物知り顔・もみぢ葉・盛り物・宿り木・遣り戸・譲り葉・寄り所・分け目・ゐ所・をば捨て山・折り枝・折り毎・折り櫃

源氏物語(源氏物語大成索引　1～207頁　和歌か否かの確認はしていない)

肖え物・赤朽ち葉・明け方・遊び敵・遊び種・遊び所・遊び物・遊びわざ・扱ひ種・顕し衣・在りか・有り顔・有り様・青朽ち葉・生き返り人・い出し車・斎き娘・厭ひ顔・挑み顔・挑み心・挑み所・否び所・祝ひ事・入り綾・入り江・入り方・入り日・浮き木・浮き草・浮き島・浮き橋・浮き舟・浮き海布・浮き紋・後ろ見顔・うち垂れ髪・うちつけ心・うちつけ言・うちつけ目・打ち解け顔・打ち解け姿・打ち解け文・打ち解けわざ・打ち目・打ち物・移り香・恨み言・恨み所・恨み文・羨み顔・憂へ顔・植ゑ木・老い木・老い御達・老い人・置き所・置き物・贈り物・行ひ人・押し明け方・落ち栗・威し種・驚き顔・おはし所・追ひ風・生ひ先・生ひざま・生ひ末・思し顔・仰せ言・おまし所・

思ひ顔・思ひやり事・織り様・織り物・おれもの（痴者）・懸かり所・隠し顔・隠れが・隠ろへ事・かけご（懸籠）・懸け路・懸け盤・懸け道・賭け物・かしづきひと（傅人）・傅娘・傅物・語らひ人・被け物・かねごと（予言）・返り事・帰り様・通ひ所・狩り衣・狩りころも・消え方・消え所・聞き知り顔・

以上の語彙を見渡すと、初期の仮名文の作品には、「動詞連用形＋名詞」という形態は多くはない。そして、竹取物語にある「有り様・仰せごと・織り物・返りごと」は、どの作品にもありうる語であり、その他「遣り戸・遣り水・有様・薫き物・住みか・仰せごと・好き者・好き事・舞ひ人・縫ひ物・立て文・絶え間・狩り衣」などもそれに同類のものであろう。竹取物語には極めて少なく、土佐日記にも和歌にある語を省くと極めて少ない。伊勢物語でも、和歌にある語が多くて、それ以外は少ない。蜻蛉日記になると、やや増している。紫式部日記にも多いとはいえない。ところが、枕草子や源氏物語になると、語彙が増す。

そして、まとめてみてみると、和歌に案外、この形態が多いといえるのではないだろうか。特に三語以上の結合形態は、枕草子・源氏以前の日記・物語にほとんど見出せないが、和歌には、古今集に既に見出せる。

例えば、古今集に次のような歌がある。

夏と秋と行き交ふ空の通ひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

（巻三　夏歌　168　みつね）

「行き交ふ・通ひ路」は、次の歌では「行き交ひぢ」と一語に圧縮され一首に収まる。

かりそめの行き交ひぢとぞ思ひこし今は限りの門出なりけり

（巻十六　哀傷　862　在原しげはる）

「行き交ふ」＋「交ひ路」としての二語が合一されているが、さらに「行き＋交ふ＋交ひ＋路」というように分解可能だから、四語から成るのである。「胸走り火」も、蜻蛉日記に「胸走り」が一例あるが、この語は他にない。（注　後撰集は、掛詞が多い歌集であるためか、長い複合語は見出せなかった。「逢ふ坂」「飛ぶ火野」のように、地名でも、連体形で接続する語が目立つようである）。拾遺集では、「枝垂り柳・打ち垂れ髪・片割れ月・解き洗ひ衣・道行き人・藻狩り舟」のように三語以上が見出せる。

このことは、「動詞連用形＋名詞」形が、和歌に好まれた形態であるといえるのではないだろうか。物の名や地名など、日常にも用いられる形態ではあるが、それは、あまりに一語化する

ので、かえって、普通に（改まって和歌などを意識しないと）新たに造語しにくい面があるのであろう。(3)

三

三語形成の語構成からなる語には「――顔」という表現が多いのが目立つ。

和歌では八代集では「――顔」は、後撰集から用例が見えるが、それほど種類も語数も多くはない。

かほ(顔)（八代集のうち、御拾遺集まで）

あさがほ・ありがほなり・あるじがほ・うらみがほなり・かこちがほなり・ことありがほなり・しらずがほなり・しりがほなり・ならしがほ・濡るるかほ・はなのかほ・ひとまちがほ・みかほ・みなれがほなり・もちがほなり・わすれがほ

参考までに述べると、八代集で「顔」そのものの用例は非常に少ない（後撰1　拾遺3　後拾2　千載1）。ゆえに、「――顔」は和歌に好まれる語ではないようである。しかし、「――顔」は和歌に好まれたとまでいえなくとも、「顔」そのものよりは好まれたことはいえよう。

仮名文でも用いているが、種類は「知らず顔・――知り顔・――有り顔・したり顔・思ひ顔・まさり顔」などが中心である。源氏ほど多彩ではない。源氏物語には種類も頻度も多い。

顔―あさがほ・ありがほなり・あるじがほなり・いとひがほなり・いとひきこえがほなり・いどみがほなり・うしろみがほなり・うちとけがほ・うらやみがほなり・うれへがほなり・おどろかしがほなり・おどろきがほなり・おぼしがほなり・おもひがほなり・おもひおよびがほなり・かくしがほなり・ききがほなり・ここちよがほなり・こころえがほなり・こころかはしがほなり・こころゆきがほなり・ことづけがほなり・さらぬがほなり・したてがほなり・したりがほなり・しづめがほなり・しらずがほ・しらぬかほなり・しりがほ・すみつきがほなり・そむきがほなり・たちならびがほなり・たのみがほなり・つきのかほ・つれなしがほ・ところえがほなり・なびきがほなり・なれがほなり・ぬるるがほなり・ねたましがほなり・はなのかほ・はなれがほなり・はばかりがほなり・ふすべがほなり・へだてがほなり・まちがほなり・まちきこえがほなり・みだりがほなり・もの思ひがほなり・もよほしがほなり・もよほしきこえがほなり・ゆふ

がほ・わすれがほなり・われはがほなり・ゑみがほ・をしみがほなり

冒頭に挙げた「――種」は源氏にしかない形態である。

種―あそびぐさ・あつかひぐさ・いろくさ・おどしぐさ・かしづきぐさ・ことぐさ・なぐさめぐさ・なげきぐさ・ひとくさ・ふたくさ・みくさ・もてあそびぐさ・もてなやみぐさ・ものおもひぐさ・もののくさ・もよほしぐさ・わらひぐさ(傍線は「動詞連用形＋名詞」の語形である)。

和歌には「――草」という語形が多い。古今集だけでも、

あやめ草・浮き草・かはな草・恋忘れ草・下草・忍ぶ草・月草・夏草・人忘れ草・冬草・水草・若草・忘れ草

が用いられている。これらの連想から「――種」が作られた可能性も否定はできないであろう。

このようにみてくると、源氏物語の作者は、造語するにあたって、和歌に好まれる語構成を利用することによっている面が多いように思われる。源氏物語には歌語やそれに近い語が用いられていることは指摘されてきたが、語の構成からみてみることも、有意義なことではないであろうか。和歌の語は三十一文字の中に入れるという制約があり、圧縮表現を求められる。源氏物語も、圧縮表現を好み、その中で、和歌的な圧縮法を応用していったように思えるのである。そして、さらに言えば、かかる圧縮法は、案外、漢語の翻訳的訓読の語の圧縮法と通じる面もあることを別の機に述べてみたいと思っている。(4)

君はとけても寝られ給はず、いたづら臥しと思さるるに、御目さめて……（帚木）の「いたづら臥し」のごとき凝縮した造語は和歌もあろうけれどもむしろやはり漢語からえたものであろう。ここらに至れば恐らく紫式部の専売特許なのであろう。(5)

と玉上琢弥氏が以前から述べておられるが、「漢語から得た」といっても、漢語そのまま得たのではないであろう。むろん漢語は、一語としては音読されることもあるが、文としては訓読して読まれたので、一つの語も訓読された可能性も高い。訓読的な読み方を知ると、自然にその簡潔な造語法に学ぶことも少なくなかったと思われるのである。

訓読の語彙については、普通は、和文の語彙とは異なると説かれてきた。ところが、訓読の中でも、日本書紀は特殊で、かなり和語に近い訓がなされているといわれる。そして、日本書紀の古訓における語の構成は、次のような特色があるという。築島氏の書をそのまま引用する（出典諸本省略）。

次に連体修飾語とそれを受ける体言、例へば、「赤駿」「別本」などに於て、一般の訓読では、「赤キ駿」「別ナル本」又は「別ノ本」の如く、修節語を訓ずるのに用言の連体形又は体言に助詞のノを加へた形で訓じ、全体で二語（二文節）として読むのが普通である。所が、日本書紀の場合は、「アカウマ」「アダシフミ」のやうに、体言や形容詞語幹などを直接体言に冠して、全体で一語となるやうに訓じてしまふことが非常に多い。これは日本書紀の訓法が、一般の訓読が即字的なのに対し、語句全体を包括して一語として訓ずる方針なのであって、意訳的傾向が強いのであり、又、同時に純国語的な要素が増すことにもなるのである。

〔体言十体言〕（普通は「体言十ノ十体言」）

トモ人従者・チカラヒト健児・カラヤッコ韓奴・フチカタ藤形・フナイクサ・ヤフサハ藪澤・カトモト門底

〔動詞連用形十体言〕（普通は「動詞連体形十体言」）

ウカミ人間諜者・カラ枯山・ヨサシトコロ任所・イツハリコト設言

〔形容詞語幹十体言〕（普通は「形容詞連体形十体言」）

サムカセ寒風・イヤシヒト疋夫・アカウマ赤駒・アシハラヘ悪解・アラノラ荒郊・フルコト旧例・アヲウナハラ蒼海

〔形容動詞語幹又はその他の体言十体言〕

コト異父・モロヒト衆人・ヒトホネ一骨・フタヤカラ二族

（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』第二節日本書紀古訓の特性（東京大学出版会　一九六三年　一四六から一四七頁）

ここで述べられていることは、今まで和歌や源氏の語構成で述べてきたこととほとんど同じことであるのに驚く。特に、第2項の「動詞連用形＋体言」は、本稿でとりあげている問題にそのまま関係している。

このように、源氏物語の造語法が、和歌や訓読語の語構成と類似していることを眺め、相互の関係を探ってみることは、無意味ではないと思われる。一語一語の考察も大事であるが、語の構成法という観点から眺めていきたいと思う。

【注】

(1) 拙稿「源氏物語の圧縮・集約表現」(『源氏物語の展望　第二輯』三弥井書店　二〇〇七年)

(2) 拙稿　「「――種」「――顔」という表現をめぐって――源氏物語の造語法からみて」(『源氏物語の展望　第四輯』　三弥井書店　二〇〇八年)

(3) 現代語でも、「行く先」と「行き先」は、意味が微妙に異なり、後者のほうが、具体的な場所を示す場合が多いであろう。「行く先」はまだ固定化している表現だが、「落ちる葉・落つる葉」と「落ち葉」では、前者は一語とは解せない。

(4) 注の2にある拙稿で少し述べてみた。

(5) 玉上琢弥「源氏物語のことば」(『文学』第二十六巻第十二号昭和三十三年十二月。『源氏物語研究』角川書店　所収)

(かみたに　かをる・京都光華女子大学名誉教授
大阪女子大学第12期生)